

# 良経「治承題百首」「西洞隠士百首」考——九条家失脚を軸として

内 野 静 香

はじめに

良経には、「建久七年の政変」（建久七年（1196））——一月二五日に決定的となった、源通親らによる九条家排斥の動きを言う。この政変によって、兼実は閑白罷免、良経は内大臣留任のまま籠居を余儀なくされた。）と相前後して詠まれた「南海漁父百首」「治承題百首」「西洞隠士百首」という三種の百首がある。慈円との贈答となっている三百首のうち、「南海漁父百首」と慈円の「北山樵客百首」の応酬については前稿で考察した。<sup>（註1）</sup>本稿では、主として「治承題百首」と「西洞隠士百首」を扱う。但し「南海漁父百首」についても、適宜言及する。

治承題・西洞隠士二百首が政変と相前後して詠まれたことは周知の事実であるが、その成立順という点に関連してということになる、幾つかの論考が提出されている。「南海漁

父百首」の成立問題と深く関わっている。「治承題百首」の成立時期を中心に、研究史を整理しておきたい。<sup>（註2）</sup>良経の和歌作品を分析するに際して、九条家の政変による失脚との関連は看過できないと考えるからである。久保田淳氏は、「治承題百首」中の、

鈴鹿川八十瀬白浪分け過ぎて神路の山の春を見しかな

（神祇四九〇）

が、「後京極殿御自歌合」では良経の伊勢下向時の詠としての詞書を持つこと、及び、

山陰や花の雪散る曙の木の間に誰を尋ねむ

（花四一三）

が、建久六年（1195）二月披講とされる良経家五首歌会での俊成詠の影響を受けている点から、同百首の成立を建久六年三月以降とする。また、

代々の春秋の宮人折り挿頭せ雲井の庭の藤の盛りを

（祝四七七）

に「妹中宮（宜秋門院）任子の御産という慶事による一家の繁栄」との関連が見出される点、及び「全編に暗い影の射していない」点から、成立の下限を政変が勃発した同七年一月二五日以前とする。<sup>（注3）</sup>

さらに石川一氏は、四七七歌は天皇の外戚となつて繁栄する九条家を象徴しており、任子の皇女出産以前の詠と考える方が自然であるという点から、同百首の成立を建久六年二月二九日以降、同年八月一三日以前とする。<sup>（注4）</sup>これら先学の成果を踏まえ、本稿では「治承題百首」を建久六年三月以降同年八月一三日以前に成つた、政変の兆しすら見られない、良経にとつて上昇機運の中の詠と考へておく。

百首歌の題をみてみると「治承題百首」は、その歌題からも兼実の後継者としての良経の意識が表れていることが安井久善氏によって示されている。<sup>（注5）</sup>「西洞隠士百首」はその呼称からも明らかに政変以降の詠とされ、寺田純子氏が指摘する

ように私的な百首歌であり、<sup>（注6）</sup>衆目に晒されることを勘案しないという意味で偽りのない心情吐露がなされているものと考えられる。心情吐露という点で「南海漁父百首」では、良経の作品全体を覆う「家」意識と厭世感が見出された。この視点を以つて和歌表現の分析を行い、政変を軸として慈円と詠み交わした治承題・西洞隠士二百首の差異を考察する。

良経が政変から受けた衝撃は、政変以前の公的世界での活躍ぶりとの落差から、甚大であつたことが容易に予想される。特に「西洞隠士百首」において、失意の中で詠じたという状況が、どのような形で和歌作品に反映するのかという点に着目したい。現実生活の急落によつてもたらされた実情が心情吐露の基軸となり、和歌作品に変化をもたらすことを明らかにしたいと思つている。

そこで、本稿では各百首に使われている歌句を具体的に検討することで、九条家失脚と前後する二種の百首の対象的な性格を明らかにしたい。

## 一 「家」意識

撰閑家にとつて娘の入内と出産は、政治上の地位確立とも密接に関連するものである。当時の社会状況をみると、天皇

を中心とする公家勢力の弱体化を推進するように、武家勢力の台頭が顕在化する時代であった。しかし、源氏の棟梁たる頼朝さえも皇室との接近を願ひ、長女大姫入内を企んでいたように、皇室との姻戚関係は政治力の強化に対して、なおも重要な事柄であった。任子の皇女出産と、政敵源通親猶子の在子の皇子出産が政変の遠因であったことを考えると、良経の落胆ぶりは容易に推察できる。ひいては和歌作品に何等かの変化を生じることが充分考えられる。ここで、和歌表現における変化が顕著に見出される例をみていく。(引用の良経歌に付した番号の上に識別のため、無印Ⅱ「南海漁父百首」、AⅡ「治承題百首」、BⅡ「西洞隠士百首」と付す。)

(一) 「春」 「曙」

A① 鐘の音の春を告ぐなる曙にまづうち払ふ霜の狭筵

(立春四〇〇)

B① 冬の夢の驚き果つる曙に春の現のまづ見ゆるかな

(春六〇〇)

「治承題百首」での春歌は、まずは霜の筵を払う(A①)

として冬との決別と春の到来への歓迎を示す歌から始まっている。一方、「西洞隠士百首」では、B①と歌い出している。久保田氏はB①歌の初句「冬の夢」に対して、政変などの「何か寓する所」を見出した。<sup>(注8)</sup>この「冬の夢」は、

冬<sup>1</sup>のよは時雨に夢<sup>2</sup>をさましつつのどかに明す事のなきかな

(堀河百首・九〇〇「時雨」頼頼)

にみられるように、冬が風音の激しさ故に夢を見ることが難しい季節とされてきたことなどから、まどろみの中の浅い夢、見ることの叶わぬ夢を意味する。もともとそのような含意を持つとされてきた「冬の夢」を、B①歌ではさらに「驚き果つる」としている。はかない夢を見る機会も果てた詠歌主体は、現実を直視することになる。

また「曙」といえば、幻影的に明け行く春の曙を詠む例の多かった良経であるが、「南海漁父百首」での、

① 君が代に出でむ朝日を思ふかな五十鈴川原の春の曙

(述懐五八五)

に明らかのように、人生の春を重ねていう例も見出せる。<sup>(注10)</sup>だが、B①歌では「曙」に見ることができたのは「現実」でし

かなかつたとする。春歌の歌い出しに、冬歌に詠み込まれるべき殺伐とした風音を感じさせ、寂寥感を表現している。周冊が春を迎えようとも、自身が直面する「現実」は寂寥感に満ちた殺伐としたものであるという。

同じく「西洞隠士百首」において「春」の「曙」を詠み込んだ、

B②帰る雁雲の何処になりぬらむ常世の方の春の曙

(春六〇六)

では、『源氏物語』須磨巻での描写が下敷にされている。都に帰る旧友と、一人須磨に留まらざるを得ない光源氏との対比が描かれている場面である。このB②歌は、帰京を間近に控えた友と光源氏の間で交わされた贈答歌の中でも、光源氏への答歌として詠まれた、

ころから常世をすててなく雁を雲のよそにも思ひける  
かな(民部大輔)

に詞の多くを拠っている。その上でB②歌では、詠歌主体を「帰る雁」を見送る立場の人物に置き換え、永遠の理想郷「常世」の「春の曙」を遠くに見ている。他者との比較によつ

て孤独感の募る様が詠じられている。

つまり、「西洞隠士百首」における「春曙」とは、春の到来を名実ともに享受できる他者の存在を良経に知らしめ、人生の冬に在る自身を認識させ、失意を深めさせる働きをしているのである。

(2) 「花」

A②三吉野は花のほかさへ花なれや真木立つ山の峰の白雲

(花四一二)

A③花は皆霞の底に移ろひて雲に色づく小初瀬の山

(花四一四)

B③誰にとて春の心をつくば山このもかのもに風渡るなり

(春六〇一)

B④花に似ぬ身のうき雲のいかなれや春をばよそにみ吉野の山

(春六〇九)

B⑤色に染む心の果てを思ふにも花を見るこそ愛き身なりけれ

(春六一〇)

B⑥山深み花より花に移り来て雲のあなたの雲を見るかな

(春六一一)

B⑦三吉野の花の陰にて暮れ果てて朧月夜の道や惑はむ

(春六一二)

「治承題百首」の「花」題でのA②・③歌などは、遠き「山」を望む視点で詠んでいる。また、「花」と春が直結しており、眼に映る景物全てが春の息吹を感じさせることを詠んでいる。つまり、詠歌主体は、「花」咲く春の中に季節の享受者として存在しているのである。

「西洞隠士百首」の春歌にも「花」の詠まれた例は多いが、ここではB④・⑤歌など「花」と「憂し」が併用されている表現が目につく。ここでも「花」は春を象徴するものとして捉えられているが、春という季節と自身とが別次元の存在として捉えられている。一章(一)「春曙」での他者の存在と同様に、「花」と比較して我が身の不遇さを痛感している。

そして、B④・⑤歌にみられたような、やや距離をとった地点に立脚して「春」の「花」を眺める姿勢は、B③歌にも見出される。春歌全体を、春賛美一辺倒ではない冷めた見方が覆っている。B③歌に詠み込まれている「春の心」には、

つらきかななどで桜の長閑なる春の心にはざりけん

(長秋詠草・一一)

山ざとはすみてあだにぞなりぬべきはるの心のはなにみ

ゆれば(重之集・七八)

に見られるように、「春という季節自体が持つ情趣」の意と「桜の咲く季節である春にあれやこれやと気を揉む人の心」の意がある。桜の花は、世の人々がそのために気を揉んでいることにも、世の騒然とした様相にも、無頓着である。良経もまた、そのような桜に心を揺り動かされる人間の一人なのである。桜の存在あつてこそ際立つ「春の心」を詠じつつも、「誰に春の到来を告げるのか」と問うている。春からは遠い自身へのやるせなさを感じさせる。しかし、「風」によって春の到来を告げられる対象者は、人生の冬に在って「現時点では春を他所目にしか見ることのできない(B④)」良経自身となる含意もある。更にB③歌に、

つくばねのこのもかのもに影はあれど君がみかけにます  
かげはなし(古今・東歌一〇九五)

によってあまりにも有名になってしまった「筑波嶺」「このもかのも」を敢えて用いることにより、皇室の恩恵に対する期待を添え詠じている。皇室の恩恵とは天皇の庇護を受けることにより天皇を頂点とする社会の中で活躍することであるが、良経をはじめとする九条家の構成員にとっては、言うま

でもなく、天皇の外戚として政治の中核で活躍することへの祈念が込められているのではないだろうか。

ほのかな期待を表明しつつも、春の情趣を存分に感じさせる「花」が、「花」を見る自身の置かれた憂く辛い状況をかえって浮き彫りにしている。詠歌主体のいる場所は、「花から花へと奥山に移って来て」（B⑥）「道を迷うのだろうか」（B⑦）と表現されているように、あくまでも「山」なのである。深い山の中を更に深入りして行き（B⑥）、花の下で一日を過ごし、遂にはその情趣に帰路すら臆気になってゆくのか（B⑦）との不安も通底している。都から離れ「山」に在る身として「花」を身近に感じているのである。このことは、都という政治の中核からの距離を暗示しているのではないだろうか。

### (3) 「和歌の浦」

「和歌の浦」は、和歌の神として信仰の篤かった玉津島神社の神を掛けて詠む例が多い詞である。政変以前の「南海漁父百首」「治承題百首」においては、

②和歌の浦の契りも深し藻塩草沈まむ世々を救へとぞ思

(ふ) (述懐五九九)

A④藻塩草はかなく遊む和歌の浦にあはれをかけよ住吉の浪  
(神祇四九九)

と詠んでいる。②歌は、自らの手でこの沈み行く世を救おうという、為政者としての意気込みを感じさせる歌いぶりであった。A④歌は、自らの詠草を手遊びごととしながらも神に「あはれをかけよ」と呼び掛け、和歌の神への謙譲の意込めた歌としている。ともに「和歌の浦」を詠み込んだ上で、執政意欲なり神への賞賛なりを詠じている。それに対して、「西洞隠士百首」では、神祇歌群中に、

B⑧玉津島絶えぬ流れを汲む袖に昔をかけよ和歌の浦浪

(雑六八一)

と詠み、「絶えぬ流れを汲む袖」によって、「撰閑家の絶えることのない血脈を継承する自身」の意を表している。その上で、「昔をかけよ」と呼び掛けるのである。「和歌の浦」の神と同等の悠久性を持つという点を勘案すれば、ここにいう「昔」とは、二神約諾(<sup>神13</sup>)に始まる藤原氏の繁栄であり、天皇の外戚としての繁栄の時期である。往時の約束に違ふことなく、九条家に皇室との強い結び付きを与えよというのである。詞の組合せによって、九条家の執政の正当性を訴えていること

になる。

「和歌の浦」を詠じた一般的な世界から、自身に引き付けた世界へと変化していることは、明らかである。そこには公の世界から切り離されたことによって、自己内省の深まってゆく様子が浮かび上がる。

#### (4) 「法の灯火」

「法の灯火」という詞は、「無明長夜を明るく照らす灯火としての智慧」の意の「法灯」を和語化したものであり、仏道修行に励んだ選子内親王の、

あきらけきのりのともし火なかりせばこころのやみのい  
かではれまし(発心和歌集・三三三)

が早い例として挙げられる。この例が示すように「法の灯火」なくしては無明長夜の闇に迷う詠歌主体自身の心を真の道へと解き放つことはできないのである。仏法の興隆に心血を注いだ慈円と兼実との贈答歌、

すでにきゆる法のともし火かかげずは猶うかるべきやみ

とこそ見れ(拾玉集・五一三七)

大岳のみねさわがしく吹く風をしづめずはいさ法のとも  
し火(同・五一七五 兼実)

にみられるように、詞自体の意味以上に自身と深い関わりを持つ宗教的な意味合いをもって、九条家構成員には受け入れられていたようである。実際、この詞は慈円に多用されており、良経は慈円によって作り上げられた詞の意味を継承している。「西洞隠士百首」での、

B⑨永き世の末思ふこそかなしけれ法の灯火消えがたの頃  
(雑六九八)

においても先に掲出した慈円歌の影響は著しい。「南海漁父百首」では「法」に関して、

③さりとともと光は残るよなりけり空行く月日法の灯火  
(述懐五九七)

④神を崇め法を広むる世ならなむさてこそしばし國を治めよ  
(述懐五八七)

と詠んでいる。③歌は、天を巡る月や日のように、法の灯火

も遍く世を照らす様を詠じている。良経は父や叔父の活動を高く評価し、現世に光明を見出していたことが分かる。慈円と兼実のつながり、あるいは仏法による王法興隆に関して言及すれば、④歌において、神仏の崇拜により円滑な政治を行おうという為政者としての決意表明がなされていたことも看過できない。

「南海漁父百首」では、「法」「法の灯火」という詞を用いて為政者としての自身を自覚的に表現し、政教性の強い作品となっていた。この場合における九条家の執政とその後嗣としての明確な意識は、「家」意識とも言える。「法」「法の灯火」に着目した場合の③・④歌との比較によっても、「西洞隠士百首」詠歌時点における良経の失意の程は知られる。B⑨歌ではその「家」意識の依って立つ所、つまり、足場の脆さを「法の灯火消えがたの頃」と表現したのではないだろうか。九条家構成員が一丸となって取り組んできた活動が停滞した状況を愁えていると考えられるのである。

## 二 厭世感

良経の心中には常に厭世感があり、隠遁志向も生来の志向であった。

A⑤春を待つ花の匂ひも鳥の音もしばし隠れる山の奥かな

(歳暮四四五)

A⑥世の中は下り果てぬと言ふことやたま／＼人の真なるらむ

(述懐四八五)

B⑩一年を眺め果てつる山の端に雪消えなばと花や待つらむ

(冬六七八)

「治承題百首」においても、A⑤・⑥歌をはじめとして、その傾向は看取できる。

A⑤歌は、開花を待つ花や春を告げる日を心待ちにする鳥・鶯は、あくまでも「しぼし」山奥に隠っているにすぎないことをいう。歳暮れという冬の次には当然春が到来するものとして、春の到来に何の疑念も抱いていない。順当な官位の昇進をみていた良経にとつて至極当然のことであった。

「西洞隠士百首」において、冬歌のうちA⑤歌と同様の時期である歳暮に相当する歌は、B⑩歌である。良経が山に隠れ住むことを詠む際には西行歌の影響が顕著であるが、ここでも西行歌を参考として挙げ得る。

よしの山やがていでじとおもふ身をはなちりなばと人や

まつらん(山家集・一〇三六)

西行歌は、自分の意志で山住まいを決行したのだとの表明を行いながらも、都で自分の下山を待つ人物を詠み込み、他者から思いを寄せられている自分という存在をも示している。隠棲の気構えを詠じてはいるが、他者の存在の詠み込み方によって、世俗との関わりを色濃く漂わせている。B⑩歌の上句では、過ごして来た一年を振り返り、山里で物思いに終始していたことを回顧している。B⑩歌には、西行歌の持つ他者への息遣いといったものが一切感じられない。西行歌との関連を考えると、B⑩歌に詠み込まれている場である、詠歌主体が孤独に住まう「山の端」にあって、「花」は何を待っているのだろうかという疑問が生まれる。下句では、雪が消えたならば、花は咲き誇る春が訪れることを待っているのであるうか、という。上句に籠居の身を、下句には雌伏の後の飛翔に向けて待機する姿を含ませているのである。春の到来を確信し断言できない所にも、良経の心情は表れているのはなかるうか。その意味で、A⑤歌とB⑩歌の落差は歴然としている。

A⑥歌においては、この世を下り果ててしまった末世であるという他者の言葉を承けて、偽りの多い世のうちにも真実の存在を認めている。自分一人の感懐ではなく、他者との交流からもたらされた感懐である。このことから、「治承題百首」詠歌段階における述懐歌を詠む素地としての観念は、人

間関係の中で構築されていることが分かる。

(1) 「うきよ」

A⑦うきよかな一人岩屋の奥に住む昔の袂もなほ萎るなり

(述懐四八八)

B⑪うきよかなとばかり言ひて過ぐしけむ昔に似たる行く末もがな(雑六九一)

「うきよ」が「現実世界」と「憂く辛い世」の掛詞であることは自明であるが、A⑦歌とB⑪歌では「うきよかな」と嘆じた時点と詠歌時点との隔たりが目に残まる。「治承題百首」では、A⑦歌として、隠者の立場を託つ姿勢を示している。「治承題百首」に詠まれた隠棲の許されない身上での隠棲への憧憬は、「花月百首」に既に認められており、実感を伴わない観念的述懐歌である。政治の中枢にあった時点での、束の間の現実逃避といえる。他方、「西洞隠土百首」では、B⑪歌として、徒らな物思いに耽っていた頃の自身を顧み、当時当然の様に思っていた洋々たる前途が、実現して欲しいものだという。自身を隠者に準えて詠じた俗世からの遊離は、

俗世から隔離されたような現状にあっては、まったくもって徒らな物思いであったことを痛感している。片山氏の言うように「順境にあって憂き身を嘆いた述懐歌の限界を表白<sup>（注17）</sup>」していることも事実であるが、「治承題百首」と「西洞隠士百首」を比較した場合、自己内省を経たという点に和歌作品の述懐性深化の度合を見るべきであろう。

B⑩歌の下句に表出する良経の心情については、「順境にあって、隠棲を慕い、憂き世を嘆いたかつての自分を懐かしみ、あの境涯に再び帰りを希求する」とする片山氏の見解<sup>（注18）</sup>が首肯できる。良経の「昔」の詠み込み方を見てみると、

昔誰かかかる桜の花を植へて吉野を春の山となしけむ

（花月百首「花」二）

昔思ふ隅田川原に鳥も居ば我も都の言問はでやは

（二夜百首「寄河恋」一六一）

など、懐古の念を持って神代以来の過去を「昔」と包括的に表現していることが分かる。加えて、任子入内後には、B⑧以外にも「南海漁父百首」に

⑤明らかに昔の跡を照らさなむ今も雲井の月ならば月

（述懐五八六）

として、「雲居の月」が、かつて藤原氏が天皇の外戚として絶対的繁栄を誇っていた「昔の跡」を照らし出す様を詠じ、皇室と九条家が緊密な関係にあることを詠んでいる<sup>（注19）</sup>。このことから、B⑩歌にいう「昔」は懐古の対象となる一般的な過去をさらに狭めた、直近の「治承題百首」詠歌時点における目標、すなわち、天皇の外戚となることが現実性を帯びていた状況を指すことは明らかであろう。

(2) 「名」あるいは「身」

良経の、世間から隔離された失意の心情が端的に表れた歌は、「西洞隠士百首」での、

B⑩昔の下に朽ちざらむ名を思ふにも身をかへてだにうきよなりけり（雑六九五）

である。思案を巡らせ、宿願を果たし俗世から離れてみても、やはりこの世は憂き世であるという。「憂き世」に対する厭世感をいうのであるが、「名を思ふ」意識が確固として存在していることも事実である。

以下に挙げるように、「治承題百首」「西洞隠士百首」とも

に、「名」あるいは「身」を詠み込んだ歌がみられる。ここにいう「名」とは、九条家の「家」としての「名」であり、撰閑家継嗣としての良経自身の「名」である。

A⑧埋づもれぬ後の名さへやとめざらむなすことなくてこの  
よ暮れなば（述懐四八七）

詞には表れていないが、A⑧歌と比較し得る歌として、

B⑬数ならば春を知らまし深山木の深くや谷に埋もれはてな  
む（雑六九七）

が挙げられる。A⑧歌は、「なすことなくて」無益に時が経過してしまえば、現時点では「埋づもれぬ」後代に伝わるであろう「名」さえも留め置くことができないであろう、という。何事かをなさなくてはなるまい、という思いが表出している。一方、B⑬歌では、人臣を極めていた頃に比較して、現在の自身を谷底の埋もれ木とみなしている。埋もれ木が誰にも知られることなく朽ちてしまうことに共感を覚えているのである。

また、「名」を体現すべき存在としての自身を指す「身」を詠み込んだ歌には次のようなものがある。

A⑨後も髪し忍ぶに耐へぬ身とならばその煙をも雲に霞めよ  
（忍恋四五九）

B④花に似ぬ身のうき雲のいかなれや春をばよそにみ吉野の山  
（春六〇九）

B⑤色に染む心の果てを思ふにも花を見るこそ憂き身なりけれ  
（春六一〇）

B⑭照らす日を覆へる雲の暗きこそ憂き身に晴れぬ時雨なり  
けれ（冬六六六）

B⑮曇りなき星の光を仰ぎても誤たぬ身をなをぞ疑ふ

B⑯人の身の終には死ぬるならひだに頃は心に任せざりけれ  
（雑六九二）

B⑰かくてしも消えや果てむと白露の置き所なき身を惜しむ  
かな（雑六九六）

このように、「身」という詞を詠み込む際には「憂し」やそれに類する詞を併用することが多い。<sup>（20）</sup>また「西洞隠士百首」での詠み込み例の多さは、自己内省へと沈み行く良経の姿を表しているものと考える。

B④・⑤歌では、一章（2）で述べたように、春を象徴する「花」と自身を比較することによって、自身の辛く憂鬱な

様相がより明確に照らし出されてしまうのである。

B ⑩歌では「照らす日」という詞によって天照大神を想起させ、その末裔の皇室との関連が詠じられている。上句に詠み込まれている「雲」には、九条家全体を覆う暗雲の意が汲み取れる。さらには、日の光を遮る暗雲を、皇室の恩恵から自家を遠ざけている政敵源通親らと捉えることができよう。「憂き身」として個人の述懐を詠じてはいるものの、常に「家」を意識していることも示されている。つまり、「家」意識とは不可分な状態で、個人の感懐が詠まれているのである。B ⑩歌では上句に「星の光」が、下句には「身」が詠まれている。建久四年秋に催された「六百番歌合」のための百首歌「調合百首」に次のような歌がある。

星合の空の光となるものは雲居の庭に照らす灯火

(乞巧奠三二六)

宮中の灯火の光こそ、この広い天空を照らす光であるという。B ⑩歌では、建久四年当時には存在した宮中との関わりが現在途絶えたかのような状況にあって、不変の天空を仰ぎ見ている、という。初句「くもりなき」は良経と慈円に、第二句「星の光」は慈円に詠まれることが多く見出される。このうち「くもりなき」は、良経や慈円に限らず、天象の美し

く照る様をいい、更には天皇の治世を寿ぐ際に用いることが常套であった。なかでも慈円・良経は、自身と皇室との深いつながりを詠出する際に用いている。政治状況とは無関係に光り輝く星との対比により、約束を違えることのない自身の置かれた状況がいかに「疑ふ」に足るものであるかということという。将来を囑望されていた「身」が「星の光」の届かない場に置かれている状況自体に疑念を抱いているのである。

B ⑩歌は、自らの死期を予言したかのような西行歌、

ねがはくば花のしたにて春しなんそのきさらぎのもちづ  
きころ(山家集・七七 西行法師家集・五二)

からの影響を受けている。<sup>へ注22</sup>当時、良経を含めて周辺歌人たちがこぞって絶賛した、西行の死への態度がここでも賞賛されている。西行に比して、思い通り死ぬこともできないことへの自嘲が込められている。

⑩歌では「身」を「白露」に例え、消え行く宿命の再確認と、現世での「身」の置き所のなさを詠じている。和歌の常套手段によって、より直接的に「身」のはかなさを嘆き、宿命を受け入れつつも抗うかのような愛惜の情を詠じている。

### 三 詠歌活動への意欲

良経は「建久の政変」以前の歌壇において、新風和歌の庇護者として、自身も新風歌人として、新しい詞を積極的の作品中に詠み込んでいた。ここでは、「治承題百首」「西洞隠士百首」に見出される希少な詞を取り上げ、その用い方を検証する。まず「治承題百首」では、

A ⑩ 五月雨のふりにし里は道絶えて庭の小百合も浪の下草

(五月雨四二一)

A ⑪ 春日山杜の下道踏み分けていくたびなれぬ小牡鹿の声

(神祇四九三)

が挙げられる。

A ⑩ 歌は、静寂さをいう人の通わぬ道に生えかかる百合の葉上に置く露の涼感を詠じたものである。A ⑪ 歌の「庭の小百合」は、良経と慈円に集中して見られる表現である。先行例では「小百合葉」という形で、江帥集を草い例とし、基俊・清輔のほか俊頼の、

しほみてば野じまがさきのさゆりばに浪こすかぜのふかぬ日ぞなき(千載・雑一〇四五)

に見られるように、「野鳥崎」と併せて詠むことが慣例化しつつあった。良経は、「野鳥崎」の「小百合葉」を自邸の「庭」に移すことで、その涼感に現実感を付与している。近代の歌人によって形成された世界を継承しつつも、同時代の歌人でもあった慈円との交流の一端を示している。

A ⑩ 歌の「杜の下道」は、他歌人による使用例のない詞である。一首全体で、小牡鹿の鳴き声の響く春日山の荘厳さを表現する。踏み分け進む道という近景を視覚で捉え、小牡鹿の切ない声を遠景の景物の一つとして、聴覚で捉えている。五感を駆使して情景を詠じようとする姿勢は、いわゆる良経歌壇において定家らとの切磋琢磨の中で培われたものである。

「西洞隠士百首」では、以下の表現が注目される。

B ⑬ 晴れやらぬ軒端の梅は咲きぬらむ雪に色づく春の山里

(春六〇二)

B ⑭ 霜枯れの春の萩原うちそよぎ裾野に残る去年の秋風

(春六〇五)

B ⑮ 霜迷ふ庭の葛原色変へてうらみなれたる風ぞ激しき

(秋六五七)

B ⑯ 我が涙木々の木の葉も競い落ちて野分かなしき秋の山里

(秋六五八)

B②山の端はあるかなきかの浪の上に月を待ちつる八重の潮風

(雑六八七)

B③歌の「雪に色づく」という表現は、保憲女歌を先行例とする。

しろたへのゆきにいろづくさねかづら冬はくれどもおとろへなく(保憲女集・一一八)

保憲女歌は、雪の白を詠じ、言外に言い表される常緑の真葛の緑との対比が美しい叙景歌である。「真葛は、降り積る真つ白な雪によって表面のみ色を変えている。しかし常緑樹である真葛は、表面の白とは無関係に、衰えることもなく元の緑と勢いとを湛えている。」という。B③歌は保憲女歌と同様に叙景歌であるが、表面的に過ぎない変化という観点を、良経は意識的に撰取している。山里に身を据えて雪の降る景色を眺めながらも、そこに春の息吹を感じ取っている。そこには、都から離れた身と、人生における冬という状況を表面的な変化に過ぎないとし、政変以前に期待された活躍こそ真の姿であり、不変のものであるという思いが込められている。再生への強い思いを歌に託しているのである。

B④歌は春歌でありながら、「霜枯れ」「秋風」など詠み込

まれた詞自体もさることながら、「去年の秋風」が未だ「裾野に残る」として、秋歌の雰囲気を強く感じさせている。春に春めいた歌を詠じ得ない、良経の心理状態が窺える。また、「荻原」は、清輔の使用を早い例とするが、良経が大変好んで用いた詞である。葉に秋風を受ける様を詠むことが慣例となっていた荻の葉であるが、その荻の葉がさらに繁みとなった様をいう。俊成の、

荻原やしげみにまじるかるかやの下葉が下にしをれはてぬる(長秋詠草・一四二)

にみられるように、その繁茂ぶりを前提としている。B④歌では、「去年の秋」には繁っていた「荻原」が、冬の「霜枯れ」を経て春となった今もお寂しいままであることを詠んでいる。萌芽・新生の「春」にも関わらず「霜枯れ」た「荻原」を見て、「秋風」が残っていると感じているのである。つまり、自分ひとり取り残された失意が濃厚に感じられる叙情歌なのである。

B⑤歌の「霜迷ふ」の他歌人の用例としては、建久八年(1150)十二月詠進下命のあった「仁和寺宮守覚法親王五十首」での定家歌が挙げられる。

しもまよふ空にしをれしかりがねのかへるつばさに春雨  
ぞふる（新古今・春六三 拾遺愚草・一七三四）

B②歌よりやや早い例であろう。歌の素材として扱う季節の違いではあるが、「霜迷ふ」情景を、定家が春に残る冬の名残と捉えているのに対して、良経は冬へと向かう霜枯れの荒涼とした景を表現するものと捉えている。

一方、「葛」「裏見」という縁語を用いている点や、その「うらみなる」に、「風の激しさに、葛の裏葉を見慣れる」の意と「恨み慣れる」の意を掛ける点は、和歌表現の常套である。「葛原」という詞からは、

まくずはらなびくあさかぜふくごとにあだのおほののは  
ぎのはなちる（万葉・卷十・秋雑二一〇〇）

という歌が想起される。新しい詞を追求しつつも、和歌の常套表現を踏まえ、万葉歌の世界をも想起させる歌を詠じている詠歌の様子からは、むしろ政変の影響が薄いことが見受けられる。

一方で、荒涼とした景色を見慣れ、この世を恨み慣れてしまっているとすると陰鬱さは、良経の心情に沿った情感となっている。

B②歌は、「競い落つ」という複合語を用いることによって、自身の「涙」と競うようにして落ち、野分に吹き散らされる「木の葉」を詠んでいる。ここに、「涙」のしとどしさが窺われ、嘆きの激しさが言い表されている。

定家に、B②歌より後に詠まれたかと思われる歌がある。

老耆籠居の後秋のころ、母のおもひなる人に

なき人をこふる涙やきはふらんおつる木の葉に嵐たつ比

（拾遺愚草・二八八三）

「亡き人（母）」を思い出し、恋しさに流す涙が落葉と「競ふ」ようだという。涙と落葉の激しい様を表現しているという点では、同工異曲の歌である。B②歌には、亡母の喪に服す者への弔歌のような、明確な「かなし」みの対象は示されていない。ただでさえもの寂しい晩秋の山里に嵐が通り過ぎれば、せめてもの彩りを添えていた木の葉すら散ってしまう。その情景を目にしての「秋」の物思いと推察される「かなし」といえるが、B②歌上句での深く激しい嘆きには、一方ならぬ実情が込められていると見る方が妥当である。

B②歌は雑歌中の騎旅に当たる。（注）。「八重の潮風」の詠み込み方において、安元三年（1177）鹿ヶ谷事件の科で鬼界島へ配流となった平康頼（法名性照）の歌。（注）

さつまがたおきの小島にわれありとおやにはつげよやへ  
のしはかぜ(千載・羈旅五四二)

からの影響を受けている。良経にとって政変による籠居は、不当な処遇であるが、政治抗争の末に遠国へ配流となった康頼の鬼界島での詠は、その身上と併せて良経の胸を衝くものであった。B②歌には康頼が都との隔たりをいった「八重の潮風」が、同趣で用いられており、都から遠く隔てられた者の不遇感を表明している。

#### 四 結びにかえて

「治承題百首」「西洞隠士百首」の歌の中から、心情吐露を中心に良経の心情が端的に表れている作品を取り上げた。

「治承題百首」詠歌段階の良経は、任子腹の皇子出産を願っており、隠遁があくまでも叶わぬ夢として憧れられていた。

先の「南海漁父百首」に見出されたのと同様に、政治の中核にある者としての気概が詠出されていた。それに対して、「西洞隠士百首」での作品には、建久の政変を契機に籠居を余儀なくされ、官位の停滞に遭った者の、悲哀と内省を伴っている。

述懐歌を中心として「治承題百首」と「西洞隠士百首」との作品比較を行ってみると、前者での心情は自家の繁栄を信じ願う姿勢と政治を担うべき者の自負心と厭世感が見出されること、後者に政変による籠居を余儀なくされた良経の心情を汲み取ることができるとを確認した。和歌作品の性格の差異を明らかにすることによって、前者が政変以前の詠であり、後者が以後の詠であることの傍証を提示できたものと思う。

#### 〈注〉

1 拙稿「良経『南海漁父百首』考——述懐性の分析を中心に」(広島女子大国文15号・平10)

2 「治承題百首」成立に関する先行論文を以下に挙げる。

①寺田純子「建久末年の藤原良経——その述懐歌をめぐって」(国文学研究44・昭46)

②久保田淳「新古今歌人の研究」(昭48・東京大学出版会)

第三篇第二章第三節・六

③片山享「校本秋篠月清集の研究」(昭51・笠間書院)

④片山享「建久期における藤原良経の述懐歌」(私学研修

96号・昭59七月)

⑤石川一「南海漁父北山樵客百番歌合成立考―拾玉集伝本を踏まえて」(国文学研究83・昭59↓「慈円和歌論考」

II第二章第五節(平10・笠間書院)

⑥谷知子「藤原良経の『治承題百首』『南海漁父百首』について」(國語と國文学・昭63八月)

⑦石川一「慈円『廿題百首』『北山樵客百首』考」(中世文学研究16・平2↓同注2⑤書II第二章第五節)

⑧岡部寛子「建久期における藤原良経『南海漁父百首』述懐歌について―『北山樵客百首』との比較における考察」(富山商船高等専門学校研究集録27号・平6七月)

但し、「南海漁父百首」「治承題百首」「西洞隠士百首」の成立問題に関して、①は『秋篠月清集』所収順を重視し、「南海漁父百首」「治承題百首」との成立順とする。

また、⑥は③④における拾玉集『南北百番歌合』跋文の「建久五年仲秋」を「六年」の誤記であろうとする説に従って立論している。更に、⑧は、⑥に従って立論しており、作品の成立問題に関して、⑤・⑦に対する見解とはなっていない。

なお、片山氏は新日本古典文学大系『中世和歌集 鎌倉篇』(岩波書店・1991)の解説において、⑤・⑦を承け「建久五年仲秋」を「南北百番歌合」の一応の成立とする見解に改めている。(拙稿(注1)の注5・11参照。)

3 久保田淳著書(注2②)参照。

4 石川一著書(注2⑤)参照。

5 安井久善「九条家と同家百首和歌」(和歌文学研究20号・昭41)参照。

6 寺田純子論文(注2①)参照。

7 秋篠月清集の引用本文は、定家本系天理図書館蔵本(天理図書館善本叢書三六卷・昭52)に拠るが、適宜漢字に改め、私意により濁点を付した。なお歌番号は新編国歌大観に拠り付した。その他の引用本文は特に注記しない限り『新編国歌大観』に拠る。

8 久保田淳著書(注2②)参照。

9 「春」と「曙」とが詠み込まれている良経歌としては、

引きかへて四方の梢も霞むめり今日より春の曙の空

(二夜百首「霞」一〇一)

見ぬよまで思ひ残さぬ眺めより昔に霞む春の曙

(調合百首「春曙」三〇九)

など、政変以前の作品中にその例は多い。また、政変以降の正治・建仁期の詠と確定できる作品にも同様に幻影的に明け行く情景を詠む傾向がある。

10 『秋篠月清集』の定数歌編『百首愚草』をみると、「治

「承題百首」に「曙」を詠み込んだ例が頻出しており、「春」との関わりも深いことから人生の春との重ね合わせていることが知られる。

11 新日本古典文学大系『源氏物語 二』（岩波書店・1994）に拠る。政治的勢力争いの結果、自主的に都を離れざるを得なかった立場の光源氏が描かれている。絶大な繁栄を誇っていた折には親しくしていた者も、その大半は疎遠となる中で、数少ない友が須磨の地まで訪ねて来てくれた。互いに旧交を温め合うが、民部大輔・良清・前右近将監は都に帰るべき人間であり、須磨に留まらざるを得ない光源氏とは別れる時がくるのである。

12 片山享論文（注2④）参照。

13 天照大神が藤原氏の祖先である天児屋根命に対して、その子孫（つまりは藤原氏）に天皇を補佐する臣下としての役割を命じたという。天皇家と摂関家藤原氏との関連深さを象徴するとされた。

14 拙稿（注1）参照。

15 寺田純子論文（注2①）・片山享論文（注2④）・石川一論文（注2⑤）において論じられている。

16 良経の厭世感及び隠遁志向が「花月百首」において既に見出されることは、先学各氏の指摘するところである。

①安藤勝志「藤原良経の隠者的姿勢」（愛知大学国文学第

七号・昭41三月）

②山崎敏夫「藤原良経」（日本歌人講座四『中世の歌人II』昭43・弘文堂）

③久保田淳著書（注2②）第三篇第二章第三節四

④脇谷英勝「藤原良経の人生詠の考察―その本質と中世の意味」（日本文芸学・昭48十月）

⑤青木賢豪「藤原良経全歌集とその研究」（昭51・笠間書院）研究編二

⑥稲田利徳「西行と良経」（中世文学研究・昭62八月）

⑦池上康夫「良経歌の風体」（明治学院論叢60・平元十月）

⑧谷知子「藤原良経の隠遁志向について」（國語と國文学・平3六月）

「花月百首」での顕著な例として、

枝折りせて吉野の花や訪ねましまがてと思ふ心ありせば

〔花〕三〇）

花も皆うき世の色と眺むれば折あはれなる風の音かな

（同三七）

厭ふ身も後の今宵と待たれけりまた来む秋は月も眺めじ

〔月〕九〇）

うき世厭ふ心の闇の標かな我が思ふ方に有明の月

（同九一）

などが挙げられる。

17 片山享論文(注2④) 参照。

18 片山享論文(注2④) 参照。

19 岡部寛子「建久末年における藤原良経『西洞隠士百首』

雑歌について——『詠百首和歌』との比較における考察」

(富山商船高等専門学校研究集録29号・平8七月) 参照。

岡部氏は同論文において、「詠百首和歌」での慈円歌、

雲に月かぜに花をやながめけむあかぬ別に身をくだく  
らん(拾玉集・三〇五一)

が「月と花との歌人西行を指している」ことを指摘し、片山氏のB⑩歌下句に対する見解(注2④)を否定した上で、この慈円歌との関係からB⑩歌下句にも「『西行』のような行く末(未来)への希求」をみている。しかし、本文に示した以外にも、

繁き野は虫の音ながら霜枯れて昔の薄今も一本

(十題百首「草」二四〇)

宇津の山越えし昔の跡経りて蕙の枯葉に秋風ぞ吹く

(調合百首「蕙」三三五)

難波津に咲くや昔の梅の花今も春なる浦風ぞ吹く

(南海漁父百首「春」五〇三)

など、良経が過去全般を「昔」と表現する例は見出される。本文に挙げたB⑧歌や「南海漁父百首」五八六歌との関連を考へ併せると、慈円歌との呼応のみを重視した解釈には疑問が残ると思われる。

20 石川一「良経及び慈円の失意表現——『源氏物語』・俊頼などの受容を中心に」(『王朝文学資料と論考』(笠間書院・平4) ↓同注2⑤書II第二章第六節)において明らかにされている、慈円の百首に「飽き」を連想させる「秋」という語が全篇を通じて頻用されていることと、照応している。

21 「曇りなし」が、天象の曇りなく照る様及び、天皇の治世の陰りない様を表現している例は多く見られる。

いつよりもくもりなきよの月なればみる人さへにいりが  
たきかな(後拾遺・雑・八四一 江侍従)

まことにやそらになきなのふりぬらんあまてるかみのく  
もりなきよに(同・雑・九三〇 相模)

くもりなき君がちとせにさかづきのひかりをさへもさし  
そふるかな(散木奇歌集・七一〇)

包括的に治世の疊りない様を詠んだ例とはやや異なる、自身と皇室との結び付きを詠んだ良経と慈円の例を以下に挙げる。

疊りなき千代の光は春日山まつより出づる朝日なりけり

(月清集・一三九四)

くもりなくあまてる神のはるの日に契りしすゑはなにか  
くもらむ(拾玉集・二一一五)

たのむぞよ天照神の春の日に契りしすゑのくもりなければ  
ば(同・二一一六)

22 岡部論文(注19)参照。

23 とぶかりのかげさへ見ゆるまし水につゆふりかけよにし

のさゆりば(江帥集・四九一)

24 承久二年から三年にかけて慈円と、定家・家隆の詠じた

「二十五首題百首」での

夏の雨に庭のさゆりは玉ちりてすずしくはるるゆふ暮

の空(拾玉集・二二四一)

という歌が見出されることを指摘しておく。また、清輔歌

はまかぜになびく野島のさゆり葉にこぼれぬ露は螢な

りけり(清輔集・八三)

に抛った歌として、「南海漁父百首」においても「小百合」は詠み込まれている。

ふる里の庭の小百合玉散りて螢飛び交ふ夏の夕暮れ

(「夏」五二〇)

25 萩原とよそにききつる風の音の袂にちかく吹きすぐるか

な(清輔集・一一二)

26 『拾遺愚草』中の当該五十首には「建久九年夏」と記されている。

27 片山亨論文(注2④)参照。

28 『平家物語』巻二・三参照。なお、康頼は配流の翌治承二年には、安徳天皇生誕の大赦によって帰京している。